

老婆と「社会主義」

彼女は子供の頃視力を失くしたまま

もう七〇に手が届きそうであった

それでもシャツのつぎ当てや雑巾さしはしているのであった

貰い子の息子が一人いて

東京で地下鉄を掘っていた

夫はこんにやく屋で釜炊きをしていたが

仕事場で大火傷をして病院で死にかけていた

息子は飛んで帰って金を置いてまた飛んで帰った

こんにやく屋には労災保険もなかったのだ

老婆はすっかり弱った

誰もいなくなったトタン屋根の下で

老婆は夜っぴて念仏を唱えた

老婆はひよこひよこ頭を下げて私を拝んだ

手を合わせる老婆の姿は幼な子のように小さかった

こんにやく屋から金を取ってくれと私を拝んだ

白く濁った目玉から固まって水滴が落ちた

老婆はしきりに死にたいといった

しかしいまはとて死ねないともいった

私は老婆のしなびた手をにぎり

早速こんによく屋に行ってくることを約束した

私は起ち上がりながら

社会主義の話をしてみた

失業のない話

病気も怪我也んぶただだという話

老後の不安もない話

すると老婆はいきなり膝をのりだし

白い目玉を私に向けて声を挙げたのである

「あれえ、そっちの方さ、引越せめえけ」

(一九五七・九)